

館林市旧庁舎の利活用討論

名建築でにぎわいを

戦後日本を代表する建築家の1人として知られる菊竹清訓さん（1928～2011年）が設計した館林市の旧庁舎（現市民センター）で23日、「メタボリズム建築とまちなか再生」と題したパネルディスカッションが開かれた。文化庁職員や大学教授ら5人が、旧庁舎を核としたまちづくりのアイデアを出し合った。



旧庁舎の模型を前に利活用について話し合う登壇者

研究室（同市）代表の丸山達也さん、工学院大建築学部教授の大内田史郎さんや文化庁職員ら5人が登壇した。5人は菊竹さんの功績や設計の特徴、旧庁舎の歴史的な価値などを紹介。旧庁舎を核としたにぎわい創出に関して話し合い、「建築でテナント運営を手がける東毛建築リサーチアンづくり」「建築を巡るイベント」「菊竹さん生誕100年記念企画」などの提案や展望を共有した。

イベントは同研究所、同大の大内田研究室（東京都）、同市の3者が主催した。3者共に、同大の大内田研究室（東京都）、同市（同）などが選定され、立近代美術館（高崎市）や群馬音楽センター（同）などが選定されている。（細井啓三）

菊竹さんは、国的重要文化財に指定された「スカイハウス」や「戸東京博物館」などの設計を手がけた。社会変化に対応するため、

都市と共に成長できるよう増改築を想定した「メタボリズム建築」の先駆者として、故黒川紀章さんらと昭和の日本建築界をけん引

した。旧庁舎は1963年に完成。戸舎移転後の82年からは、公民館や教育利用できる市民センターとして運用され